-学会開催報告-

日本看護研究学会第31回近畿･北陸地方会学術集会

学術集会メインテーマ

経験知から理論知へ
－現場の悩みや課題意識こそが次へのチャンス－

久米　弥寿子

（武庫川女子大学看護学部教授・学術集会長）

会 長 講 演「今、あらためて考える経験知と理論知の行方」

久米 弥寿子（武庫川女子大学看護学部）

教 育 講 演「臨床現場で研究する人材を育成する看護基礎教育」

阿曽 洋子　（武庫川女子大学看護学部）

シンポジウム「臨床での経験を研究へ：経験知を理論知へ転換する研究プロセス」

丸山 美津子（兵庫医科大学病院）

畑中 文恵（尼崎訪問看護ステーション）

原田 さとみ（市立伊丹病院）

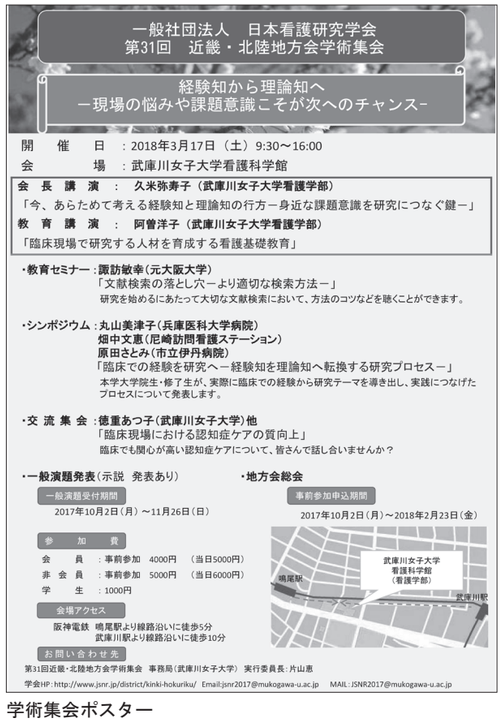
教育セミナー「文献検索の落とし穴ーより適切な検索方法ー」

諏訪 敏幸（元 大阪大学生命科学図書館）

交 流 集 会「臨床現場における認知症ケアの質向上」

代表　徳重 あつ子（武庫川女子大学看護学部）

一 般 演 題　示説　25 件



学術集会ポスター

1. 学会概要

日本看護研究学会には、現在、全国で5つの地方会がありますが、武庫川女子大学が所属する近畿・北陸地方会は1985年度に設立が認められ、若手の研究者育成を主眼とした地方会として発足しています。そうした、地方会の特色や良さを生かして、このたび2018年3月17日（土）に武庫川女子大学の看護科学館及び総合心理科学館を会場として、日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会を開催しました。

今回の学術集会では、「経験知から理論知へ－現場の悩みや課題意識こそが次へのチャンスー」をメインテーマとして、経験知を理論知に転換していく基盤となる研究活動をどう推進していくのか、また、臨床実践と看護研究をどのようにつなぐのか、どう研究活動を支援したらいいのか、もっと身近なところから探求したい、という思いでプログラムを企画しました。特に、開催場所となった武庫川女子大学の大学院看護学研究科には、社会人を継続しながら大学院で学んで修士号を取得した修了生がおり、既に臨床実践や教育現場で活躍しているという特徴も生かしつつ、地方会の趣旨を発展させられるのではと考えた背景もあります。実際の当日は、近畿・北陸地区の会員及び非会員の皆様をはじめ学生ボランティアなども含めますと約180名の方にご参加をいただき、貴重な地方会学術集会の機会となりました。

写真1　会長講演

2. 臨床現場における研究活動を支援するためのプログラム構成

1）会長講演：「今、あらためて考える経験知と理論知の行方」

会長講演では、経験知や理論知に関連する基礎用語や関係するモデル等を概観しました。まず経験知・理論知に関しては、様々な「知」（知識）がある点を述べ、さらに、「経験知」と「理論知」の特徴と課題や限界について整理しました（表1）。「経験知」と「理論知」という用語を使用する際には、その意味を自分の言葉で示し、自分自身の実践活動や研究活動における「知」の位置づけや探求プロセスを明確にしていく試みが重要であると考えます。また、「経験知」から「理論知」への道筋のヒントとして、野中と紺野（2003）によるSECIモデルという暗黙知と形式知の知識変換プロセスについて紹介しました。SECIとは、そのプロセスの共同化（Socialization）、表出化（Externalization）、連結化（Combination）、内面化（Internalization）の4つのプロセスの頭文字です。このプロセスを看護の場でも活用できると考え、実践の場における個々の「知」を可視化して共有するのかという試みの大切さを強調しました。特に、「暗黙知」と言われる熟練者やベテラン看護師が持っている臨床上の「コツ」や「勘」のようなもの、あるいは経験的なパターン認識や直感というものは、初学者や新人をはじめとして第三者に伝達するのは難しいものがあります。「経験知」を形成していくためにも、経験上で蓄積された「パターン認識」が重要であると言えます。従って、この経験的なパターンの蓄積の重要性を意識して、日々の臨床経験を積んで欲しいと思います。

また、近畿・北陸地方会という若手研究者育成という主旨に即し、「理論知」を形成していくための研究活動のバリアとなる要因の例についてあげ、若手研究者の研究活動を促進したいという思いで解説を加えました。院生指導を行いながら、現実の中の例外やパターンを蓄積して共有する機会をもつ重要性を実感しています。そして、先行研究や関連文献を踏まえて、自分が注目している問題を整理し、明確な概念として、各自の内面の思考を表出させる努力をする作業が不可欠です。単なる「愚痴」や「文句」、「批判」で終わらせず、様々な知識やデータを連結させ、研究プロセスを通してこれまでとは違う観点の知識体系を見出すことが大切なのだと思います。そして、明らかになった知識を実践の場で活用し、その後の振り返りと考察を通してさらに評価し、新たな課題を見出していくことが実践上での課題を改善していく一つの道筋であると考えます。

今回の地方会学術集会では、大学院生の方や修了生の発表もあり、研究活動を悩みながらも取り組んでいる状況が伺われました。こうした地方会の場で、関連分野の研究発表を通して情報交換するとともに、現場の課題意識を大切にして、研究活動の位置づけや実践とのつながりなど、研究を行う意義や目的をしっかりと確認し、研究活動を継続していくエネルギーにして欲しいという思いで講演を終えました。

2）教育講演：「臨床現場で研究する人材を育成する看護基礎教育」

阿曽洋子先生の教育講演では、臨床現場で研究を行うことが推奨されている中で、その研究活動がうまくいかずに悩んでいる臨床現場の看護実践者の方々に向けて、あるいは学部や大学院教育において「看護研究」をどう指導するのかという点で苦慮している看護教育・研究者に対して、あたたかく、また重要なメッセージが込められていたと思います。特に、看護学教育モデル・コア・カリキュラムの内容と看護研究の能力とのつながりを分かりやすく解説下さり、看護実践と看護研究を行う能力が根底で密接につながっているという点を再認識できました。多くの参加者の皆様が熱心に聞き入っており、看護教育において「看護研究」をどのように捉え、実践能力を育成することにおいてどんな意義があるのかを説明下さり、また臨床実践において看護研究を行うための重要なヒントをいただきました。

表1 「経験知」と「理論知」の特徴と課題・限界

	経験知	理論知
特徴	・意思決定速度の効率性と迅速さ ・知識と具体的状況の関連性 ・推測による解決策の導き出し ・微妙な差異の識別性の高さ ・例外の発見（ギャップの発見） ・パターン蓄積による認識（パターン認識） ・暗黙知による意思決定	・一般的で抽象的 ・体系的で定式化された内容 ・脱文脈的で単純明快化された内容 ・論理的で客観的な内容 ・対象の説明や予測が中心 ・実証性や普遍性を志向する
課題や限界	・経験やパターン優先によるデータの無視 ・先入観によるパターン認識 ・特異な状況の知識不足の無視 ・他との共有が困難	・実践とのつながりが不明瞭 ・理論知の内容の理解が困難 ・応用の方法に工夫が必要 ・実践とのつながりでこそ意義がある

（日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会抄録集，p14より）

写真 2　教育講演

3）教育セミナー：「文献検索の落とし穴ーより適切な検索方法」

教育セミナーでは、研究プロセスの中で課題のアウトライン明確化の際に不可欠な、情報検索の適切な方法を分かりやすく学ぶことができました。特に、①文献入手と文献検索を混同しない、②キーワード検索に頼らない、③「一発検索」では検索にならない、④文献検索の限界を知る、という 4 点を挙げて頂き、私たちが陥りがちな「落とし穴」を反省できた興味深い内容でした。本セミナーも盛況で、あらためてその重要性を感じました。

写真 3　教育セミナー

4）シンポジウム：「臨床での経験を研究へ：経験知を理論知へ転換する研究プロセス」

各シンポジストの皆様は大学院修了生で、実践と研究を両立させたロールモデルです。臨床での課題意識をどのように研究に結びつけたのかという具体的な研究プロセスや経験をご紹介頂き、経験知から理論知への道筋を具体的に共有する貴重な機会となりました。

5）交流集会：「臨床現場における認知症ケアの質向上」

交流集会では、臨床現場で大きな問題となっている認知症高齢者ケアについて、質の高いケアを行うにはどうしたらよいか、武庫川女子大学の老年看護学分野の先生方や本学大学院修士課程修了生、在学生を中心に活発な情報交換や意見交換が行われました。今回の交流集会を通して、このような機会は、今後の認知症高齢者ケアを考える上で重要であると再確認できました。

その他、一般演題の示説発表では、皆様の明快な発表に続き、具体的で有意義な質疑応答が行われました。開催にあたり、演題査読や座長をご担当頂きました皆様、展示や後援、広告を賜りました団体の皆様方、開催支援を頂きました地方会世話人の皆様、熱心に準備や運営を進めて下さった企画委員の武庫川女子大学看護学部基礎看護学分野の先生方、実行委員や協力委員、ボランティアの皆様、そして何よりも学術集会にご参加の皆様にあらためて感謝を申し上げます。

写真 4　示説会場

文献

野中郁次郎，紺野登 . (2003). 知識創造の方法論ーナレッジワーカーの作法 . 東洋経済新報社 .